

ブラジル二日目。ゆり子は観光バスに乗り込むとき、なるべく木村夫妻の近くに座ろうと決めた。老舗和菓子屋を営み、三十代独身の息子が二人いる夫妻。今こそがんばりどき。人生には戦略も必要だ。

連載小説 7

こぼれ落ちる

益田ミリ

主な登場人物

●ゆり子

派遣社員。できることなら、見た目もよく明るく感じのいい人と巡り会いたいと願う 36 歳。

●弥生

ゆり子の姉。介護ヘルパー。30代で結婚したが、現在は離婚し、妹とふたり暮らしをする 39 歳。

●清子

ゆり子と弥生姉妹の叔母。亡き夫は資産家で、子供はいない。旅行が趣味の 65 歳。

開始を知らせる花火の音がした。時刻は夜の九時を少し過ぎていて、雨でも花火はあがるのだな。

ゆり子は、日本から持参したレインコートを頭からすっぽりと被り、大観衆と同じ方向を見た。陽気な音楽だ。はるか彼方で、山車が動き始めている。

帰国後、リオのカーニバル会場を誰かに説明するとき、ゆり子は、まずこう言おうと決めた。「神宮球場みたいな感じ」。

ゲートでチケットを見せて中に入ると、すぐに、記念グッズや軽食を売るテントがある。その後、もう一度係員にチケットを提示すれば観客席にたどり着く。見やすいように、座席は後方にいくほど高くなっている。

神宮球場と決定的に違うのは、円形ではなく横長であることだった。全長八百五十メートルという長い通路を、数千人規模のサンバチームが順番に通り返けていく。その両サイドに、観客席が設置されていた。

ゆり子たちのツアーは、最前列のすぐ後ろの席である。席は棧敷のように区切られていて、ひとつのボックスが六人ほど。かなり良い席だと思います、と観光バスの中で添乗員の小野田が説明していた。

その小野田も、ここにはいない。今頃、病院にいるはずだった。急病人が出て、清子とともに救急車に付き添って行ったのだ。合流している同じ旅行代理店のツアー添乗員がいるので、観覧にはなんの問題もなかった。

それにしても、清子おばさんは速やかだった、とゆり子は振り返る。

左胸が痛むと言ったのは、いつも牧夫のような帽子を被っている六十代後半の男だった。帽子には茶色い鳥の羽根がついている。ゆり子は秘かに彼を「アルプスおじさん」と命名し、現地ガイドの話に、毎度、心のこもった相づちを打つ姿を好ましく思っていた。

夕食会場だった和食レストランで、アルプスおじさんは、妻に肩を揉んでもらっていた。

「寝違えちゃったかなあ」

目の前の天ぶらや茶碗蒸しに箸もつけず、もつと強く、ぎゅーっと押しと妻に頼んでいた。左の肩から、左腕全体がひどくだるいらしかった。

二十四時間かけて飛行機に乗ってきたからねえ。わたしも足のむくみがとれないですよ。同じテーブルになった人たちが、おのおの体調不良を訴える中、

「念のため病院に行ったほうがいいわ」

清子おばさんが、するどい声で言ったのだった。

添乗員の小野田は、清子がおみんなを笑わせようとしているのだと思い、

「あら、なあに、松下さんったら！」

冷やかしたものの、心筋梗塞の初期症状に似ている、わたしは元看護師ですと清子が言うと、とたんに青ざめた。

車を呼ぶよう小野田に指示し、アルプスおじさんとその妻にぴったりと寄り添う清子を前に、今夜のカーニバルはどうなるんだろう？ と一瞬でも思ったことを、ゆり子は後になって恥じた。